OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Sōgetsu Art Movement and Tōru Takemitsu
Author(s)	Hrvatin, Klara
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60046
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【20】

氏名	HRVATIN, KLARA（フルバティン　クララ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学位記番号	第　２６０６３　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Sōgetsu Art Movement and Tōru Takemitsu（草月芸術運動と武満徹）
論文審査委員	（主査） 教　授　伊東　信宏 （副査） 教　授　永田　　靖　　准教授　輪島　裕介

論文内容の要旨

本論文は、戦後日本を代表する作曲家武満徹（1930-1996 年）と、彼が活動初期に密接な関わりを持った草月アートセンター（以下 SAC と表記）、およびこのホールを中心として展開された「草月芸術運動」との関わりを文化史的観点から解明しようとする試みである。SAC は旧草月会館の落成後間もない 1958 年に発足し、1971 年に解散している。したがって、武満は 30 代をほぼこの草月芸術運動の渦中で過ごした、ということになる。論文は序と３つの章、そして結論から構成される。以下、その概要を記す。

まず序で問題の概観と論文の構成が予告された後、第１章は草月芸術運動自体を扱う。草月アートセンターの理念、目的、スタッフ、あるいは建物や施設などが当時の資料から再構成され、続いて SAC の活動（草月ミュージックイン、草月コンテンポラリーシリーズ、草月シネマテーク）が紹介される。その活動は生け花、映画、音楽、建築、文学、アニメーションにまたがり、脱領域・超領域的であり、国際的なネットワークも重視されていた。

第２章は武満徹と草月芸術運動との関わりを論じる章である。ここでは武満が SAC において制作した作品、あるいはそこで上演された作品がジャンル別に整理され、さらに武満が国際的な人脈作りの点で SAC において何を行ったか、ということが論じられる。彼が作品を提供した分野は、ジャズに始まり、テープ音楽、映画やアニメーションのための音楽、器楽作品、シアターピース、テレビのための作品、劇音楽、管弦楽曲、ラジオのための作品などきわめて多岐に渡っている。

そして第３章では草月アートセンターで創作された武満作品のうち、テープ音楽「水の曲」（1960 年）、映画音楽「おとし穴」（1962 年）、シアターピース「一柳慧のためのブルーオーロラ」（1964 年）の３つの作品をとりあげ、詳細な分析を行っている。とりわけ「おとし穴」については、音楽の制作に協力した高橋悠治にインタビューを試み、実際の創作現場について論じている。

以上の３つの章をふまえ、結論では武満と SAC との関わりが持っていた同時代的意味について、いくつかの論点が導き出されている。そのうち主たるものを次に挙げる。

１）武満が、SAC と関連して最初に書いた音楽はジャズであった。それ以後、武満が書いたジャズ・アンサンブルのための音楽は、多くの場合、映画音楽としてであり、SAC の時代のジャズ・アンサンブルのための作品は例外的である。

２）同時に試みられたのはテープ音楽であった。このうち「水の曲」は、とりわけ武満の創作活動にとって重要である。これは水の滴りの音だけで構成されたテープ音楽であり、SAC の音響技術者であった奥山重之助が関与した。

３）SAC のためのとりわけ重要な作品群として、ピアノ作品（「コロナ」「ピアニストのためのクロッシング」「コロナ II」）がある。ここで武満はそれ以前の 12 音主義的傾向を脱し、ジョン・ケージの影響を示し、図形楽譜の使用を試みた。

４）武満の作品群のうち孤立したグループを形成している３つのシアターピースも、いずれも SAC と関係している。ここでもケージの影響は顕著で、図形楽譜だけでなく、不確定性、ハプニング的な要素も用いられる。いわゆる「ケージ・ショック」は、武満において SAC で体験されたものであり、同時にその影響から抜け出す点についても SAC は場を提供した。

５）テレビのための作品として、この時期に武満が関与したものは３つが確認されている。このうち、『日本の紋様』（1962 年）では、琵琶、箏、謡が用いられるが、それぞれに電子的に変調され、慎重に画面にあわせて選ばれている。これは、武満が日本の伝統楽器を用いた最初期の作品である。

全体は A4 判 201 頁で、使用言語は英語である。本文中には作品の分析上必要となる譜例、図版の他、SAC と武満に関する年表、武満の当該時期における映画音楽作品のリスト、など独自の表が数多く含まれる。また巻末には、第３章第２節で取り上げられた、「おとし穴」の音楽制作に関する高橋悠治へのインタビューが収録されている。

論文審査の結果の要旨

本論文に関する口頭試問は、2013年２月４日（月）に、およそ１時間30分にわたって実施した。この論文が、武満の60年代を考える上での基礎データをよく整理した、という評価は、試問の際にも確認された。現在、６０年代の日本のアヴァンギャルドをめぐる研究は、美術史や映画史等の文脈で展開しつつあると言って良いが、草月芸術運動との関連のなかで武満を再評価するという本論文の試みはユニークであり、また重要である。これらの資料を踏査した上で、英語で一貫した整理を行った点は重要であろう。

そのような基礎データを前提として、個々の作品や事象について論述した第３章は、多くの点でこれまで知られていなかった多くの事実を明るみに出したと言えるが、とりわけ第２節の基礎となった高橋悠治とのインタビューは情報として貴重であり、本論文の成果として特筆すべきであろう。

課題として指摘されたのは、ここで明らかになった武満の活動が、その後の彼の作曲活動とどのような関わりを持っていたか、あるいは日本のアヴァンギャルド全体のなかでどのような意味をもっていたか、といったことが十分に論じられていない、という点である。また、SACの財政的側面が描かれていないことも、残念であり、最近の研究動向からするとそのようなアプローチは必要だ、という指摘もあった。

しかし本論文は、武満の６０年代にとって重要な側面を明らかにし、英語で整理しているうえに、武満の映画音楽制作の実態をきわめて具体的なレベルで解明しており、今後のこの分野の研究にとって国際的にも大きな意味を持つものとなると考えられる。以上の成果により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。